

参詣曼荼羅の空間構成

——「清水寺参詣曼荼羅」を素材として——

下坂 守

はじめに

近年の参詣曼荼羅に関する研究の深化には、目を見張るものがある。歴史学を始めとして地理学・国文学など多方向より分析が進められ、豊かな成果を生み出すに至っている⁽¹⁾。ただ、従来の参詣曼荼羅の研究の多くは、ともすれば自らの問題意識に沿った任意の画像のみを画面から抽出、これについて論じるという方法で行われてきたように思えてならない。むしろ、通図的な画像の分析については必要不可欠な方法であり、これを否定するものではない。しかし、参詣曼荼羅がどのような人々によって、いかなる目的で作成されたか、といった諸々の問題に迫るには、個別の参詣曼荼羅を分析の対象に据え、それぞれが造り上げている独自の空間構成を糺明していくことが、他方で基本的な作業として必要不可欠と考えられる。小論は、このような観点から、「清水寺参詣曼荼羅」を素材として、参

詣曼荼羅が有する固有の空間構成について考察しようとするものである⁽²⁾。

絵画史料としての参詣曼荼羅の特色の一つは、多くの場合、そこに描かれた寺社の聖域が程度の差はあれ、現在もなおそのままの形で生き続けていることにある。画面に描かれた山・川の自然はもとより、堂舎・宝塔といった地物も、現地に赴けば今も画面そのままの姿を残すものが決して少なくない。もちろんすでに跡形もなくなっているものも数多いが、その場合でも、聖域については古い時代からの案内記・参詣記が豊かに残されており、文献による比定・復元が比較的容易なことも、参詣曼荼羅の大きな特色といえる。そして、このような参詣曼荼羅の特色は、その分析・研究に現地比定や文献による考証が、他の絵画資料に較べて格段に有効であることを物語っている。「清水寺参詣曼荼羅」もこの例外ではない。小論では、「清水寺参詣曼荼羅」の画像を網羅的に取り上げ検討を加えるなかで、参詣曼荼羅の空間構成について考えていきたい。

なお、「清水寺参詣曼荼羅」は、現在、十六世紀半ばに作られたと推定される清水寺本(写真2)と、これよりやや遅れ十六世紀末に作成されたと推定される中島家本(写真3)の二本が知られている³⁾。両本の構図はほとんど同じものの、個別の図像は異なる点も少なくない。中島家本は先行する清水寺本を適宜修正して作成されたものと推定され、小論では、主として清水寺本を用い、中島家本については、必要に応じて言及することとする⁴⁾。

一、参詣道の地物

ここでは「清水寺参詣曼荼羅」を聖域を描いた大縮尺の案内図として把握、まずそこに描かれた地物の図像がなにを表現しているかを現地比定および文献によって確定し、ついでそれら地物とセットになって配された人物の図像について検討を加えていくこととする。これらの作業によって、個々の地物の地理的位置が明確になるとともに、参詣曼荼羅の画中において、各々の地物・人物が造り上げていた固有の「場」があきらかになるはずである⁵⁾。

その際、地物・人物の図像の比定にあたっては、五条橋から清水坂を経て清水寺門前の馬留に至るいわゆる参詣道と、馬留から始まるいわゆる寺内の二つに分けてこれを行いたい。参詣道は清水寺の寺内に至る道程に過ぎず、本来の聖域を構成する寺内とは本質的に異なる空間と位置付けることが可能であり、寺内とは表現形態も自ら異なると考えられるからである。この点では、歴史地理学の立場から岩鼻氏が参詣曼荼羅の空間表現の一般的特徴として指摘された、聖域は「大きく細密」に、参詣道は「圧縮」して描かれるとい

う原則は「清水寺参詣曼荼羅」にも貫かれている⁶⁾。すなわち、清水寺への参詣道は今も往時のままに残っておりその比定は極めて容易であるが(図1参照)、実際はほとんど一直線に近いこの道を「清水寺参詣曼荼羅」は著しく縮小し、かつ変形させて描き、これに対して寺内の風景は、参詣道に較べてはるかに大きく、また細密・正確に描いているのである。

このほか参詣道の地物の考察に先立って指摘しておきたい点が一つある。それは道の途中に描かれている四つの木戸の存在意義である。中世、木戸は多く場合、共同体の出入口に防御施設として設置されており、参詣道に描かれた木戸はそこがなんらかの形で境として意識されていたことを示している⁷⁾。つまり木戸によって区分された参詣道は、それぞれの地区が固有の性格を有していたと考えられるのであり、参詣道の地物の比定にあたっては、これらの木戸を目安として参詣道を四つの地区に分け、各地区の固有性を配慮しつつこれを行っていききたい。なお「清水寺参詣曼荼羅」には、五条橋から門前までの参詣道のほかに、門前から音羽滝に通じる道と、延年寺山の裾をぬってから音羽滝に至るいわゆる延年寺谷道の二つが描かれるが、このうち前者については参詣道の続きと理解し、四つの地区に続けて本節で取り上げ、後者の延年寺谷の道に関しては、縁起にゆかりの道として、後に改めて考えたい。よって、ここでは参詣道を次の五つの地区に分け、それぞれの地区に配された地物の図像について考察することとする。

A、五条橋。

B、第一の木戸から第二の木戸まで。

C、第二の木戸から第三の木戸まで。

D、第三の木戸から第四の木戸まで。

E、第四の木戸から門前まで。

F、門前から音羽滝まで。

A、五条橋

中世後期、五条橋が中島で二つに分かれていたことは、すでに瀬田勝哉氏によって詳しく紹介されており、よく知られている。「清水寺参詣曼荼羅」においても、五条橋は中島で二つに分かれて描かれているが、この五条橋の図像で留意しておきたいのは、その形態が全体として理想化されて表現されている点である。すなわち「清水寺参詣曼荼羅」では五条橋は赤い欄干と金の擬宝珠を持つように描かれている。しかし、この前後に作成された町田家旧蔵本を始めとする各種の「洛中洛外図」は、一つとしてこのような欄干・擬宝珠を持った五条橋を描いてはいない⁹⁾。そこには大ぶりの橋脚が描かれるだけであり、「清水寺参詣曼荼羅」が、現実の五条橋ではなく、あるべき姿としての五条橋を描いていたらしいことがわかる。

次に中島の地物に目を転じると、法城寺と同寺の門横の大黒堂の堂舎が目につく。この中島の法城寺と大黒堂についても、瀬田氏の詳しい考証があり、私も別に考察したことがあるので、ここではその存在を確認するにとどめる¹⁰⁾。

中島にはこのほか大黒堂と向かい合って、藁葺きの建物が描かれている。参詣曼荼羅では背面しか見えないが、各種の「洛中洛外図」などによれば、この建物は茶屋であった。「洛中洛外図」は、中島を表現する際には、しばしば法城寺・大黒堂とともに、この茶屋を描いており、この地区の表現にあたっては、欠かすことのできない地

物の一つであったようである¹¹⁾。

この地区の図像は、参詣道全体のなかで、きわめて大きなスペースを占めている。また、五条橋は現実よりもはるかに美化されて描かれており、参詣道のなかでもこの地区が特別な意味を有すると考えられていたことは、容易に想像される。これは五条橋が清水寺参詣の出発点であったことや、洛中と洛外の境の橋であったこともさることながら、その維持・管理に、清水寺の本願成就院が当たっていたことと無関係ではあるまい¹²⁾。一名、清水橋とも呼ばれた五条橋は、清水寺にとっては、寺内の堂舎に準ずる施設であったはずであり、この地区がひととき大きく描かれた最大の理由は、この点にこそ存したと考えられる。

B、第一の木戸から第二の木戸まで

五条橋を渡ったところにある木戸はこれまた各種の「洛中洛外図」に見えており、これが清水寺の参詣道への入り口の木戸であったことはまちがいない。また、それとともにこの木戸がいわゆる坂者の居住地区としての清水坂への出入り口でもあったことは、木戸を入ってすぐの風景を見れば一見してあきらかである。そこには癪者の住んだ「長棟堂」とその前で物乞いする二人の癪者が描かれる¹³⁾。

「八坂法観寺塔参詣曼荼羅」はこのあたりに犬神人の宮む弓屋と推定される家屋を描いており、この第一の木戸から第二の木戸に至る間は、のち弓矢町と呼ばれた坂者の居住地区を表現したものと推定される。したがって、長棟堂と道路を隔てた数軒の民家や、長棟堂から少し坂を上ったところに道を挟んで向かい合う何軒かの民家は、いずれも坂者の住居を描いたものと見てよからう。第一の木戸

の位置は、五条河原のはずれという、洪水などによってその地形をしばしば変化させた場所に想定されるため、その現地比定は容易ではないが、強いて現在地でいえば、宮川町が松原通りと交差するあたりをこれにあてることができ⁽¹⁴⁾。

この坂者の住居地区には、民家の他に二棟の堂舎が描かれる。このうち左の二層の堂舎は、清水寺本では参詣道に面した塀の内にあるようにも見える。しかし、中島家本ではこれを完全に塀の外に描いており、二棟の堂舎がそれぞれ別個の施設であったらしいことがわかる。この二棟の堂舎のうち、塀のなかの堂舎については、その位置および建物の構造からみて、六波羅蜜寺にあった地藏堂を描いたものと判定される。中世、六波羅蜜寺では、観音よりも地藏のほうが庶民の信仰を集めており、参詣曼荼羅が、地藏堂をもって六波羅蜜寺を代表させているのは、このためと考えられる。

では、その六波羅蜜寺と境を接して描かれた今一つの二層の建物は何に比定できるのであろうか。六波羅蜜寺に二層の建物があったという記録はなく、また地藏堂を囲む塀の外に位置しているところからしても、この建物が六波羅蜜寺外の建物であったことはまちがいない。しかし、管見の限り、この建物の正体を適格に物語つてくれる記録は残らない。ただ、時代ははるかに遡るが『梁塵秘抄』に取められた次のような今様は、あるいはこの建物の正体を解く手掛かりになるかもしれない。

何れか清水へ参る道、京極くだりに五条まで、石橋よ、東の橋詰、
四つ棟、六波羅堂、愛后寺、大仏、深井とか：

この今様に歌われた橋詰の「四つ棟」が「長棟堂」の前身とも推定されることについてはかつて指摘したことがあるが、ここで着目

したのは「愛后寺、大仏」である。愛后寺の本尊は「弥陀丈六坐像」であったとも伝えられ、大仏を安置するいわゆる大仏堂がここから連想されるからである。

近世、愛后寺は六波羅蜜寺と道を隔てたところに再建されており、場所は「清水寺参詣曼荼羅」の描くところとは一致しない。しかし、そのいつぼうで毎年一月二日に犬神人がこの愛后寺で「天狗の酒盛」を行っていたことはよく知られており、愛后寺は弓矢町の住民と切っても切れない関係にあった。これらのことを考え合わせれば、中世末に坂者が自らの手で建立したという「坂鎮守大伽藍」「坂のからん」⁽²⁰⁾とは、愛后寺を指す可能性も十分考えられる。そして、その愛后寺に大仏が安置されていたとすると、場所からしても、「清水寺参詣曼荼羅」に描かれた二層の建物は、同寺の大仏堂に比定するのが、一番ふさわしいのではなからうか。いずれにしても、この二層の建物に関しては、六波羅蜜寺とは別に、これに隣接して存在した堂舎として、今後なお考えていく必要がある。

C、第二の木戸から第三の木戸まで

坂者の居住地域は、第二の木戸をもって終りとなり、かの木戸を過ぎるとしばらく坂沿いには、めだつた施設はなくなる。第二の木戸は、江戸時代前期に作られた「洛外図」の図像などからして、現在の珍皇寺あたりに比定できるが、「洛外図」では珍皇寺前の木戸から東には、やはり民家をまったく描いていない(写真11参照)。珍皇寺以東の参詣道には、江戸時代に入っても、ながく中世後期とかわらぬ荒涼とした風景が続いていたのであろう。

この地区にあって、目を引くのは三本の卒都婆と、これと隣接し

て描かれる宝塔である。「八坂法観寺塔参詣曼荼羅」も、ほぼ同じ位置に同じような三本の卒都婆と宝塔を描いており、二つがこのあたりを象徴する地物であったことは疑いない。

そして、このうち三本の卒都婆については、文字通り「三本卒都婆」と呼ばれた施設であったことが、時代は下るが『雍州府志』巻九「古跡門」下の次のような記載よりあきらかとなる。²²⁾

三本卒都婆 在六波羅野、伝言、態谷直実於西国討平敦盛、終於此處其所擐之弓三折之、棄斯地而、入法然上人之室、薙髮為僧、後人於斯地建卒都婆三箇、表三折之弓、以為徵、

のちの『山州名跡志』巻二「元禄十五年（二七〇二）」も、この「三本卒都婆」について、『奇異雑談集』の記事を引用して、次のように記している。²³⁾

是所名ナル歟、古清水ノ辺ニ在ト見、今不詳、奇異雑談集云、応仁乱中ノ事ナルニ、五條東洞院ト高倉トノ間ニ足輕一人アリ、夏比ナルニ清水ニ参詣ス、朝食以前ニ、隔子紋帷ニ萌黄モジノ十徳ニ刀脇指宿ヲ出、中間ハ肩衣ヨリ袴ニテ、主笠ヲ頸ニカケテ手鍔ヲカタゲテ跡ニユク、畠山方ヨリ此足輕ヲ生害セントテ連々ネラフテ、此時三本卒都婆ノ辺ニテ人数アリテ、主従二人ウタル、ナリ下略

一見、たんに鳥辺野の風景を象徴するだけのように見える三本の卒都婆が、参詣道の地点標識として、欠かせないものであったらしいことが知られよう。参詣曼荼羅に描かれた三本の卒都婆は、このいわゆる「三本卒都婆」を描いたものと考えられる。

では、三本卒都婆のすぐ横に描かれた宝塔は、どのような由緒を有した宝塔だったのであろうか。現在、参詣道にはこのような宝塔

は存在しない。ただ、場所は少し隔たるが、六波羅蜜寺の寺内には遊女阿古屋の墓と伝えられる古い宝塔が安置されている。平清盛の墓ともいわれるこの宝塔については、詳しい伝来はわからない。²⁴⁾しかし、その形状は、「清水寺参詣曼荼羅」に描く宝塔と似通っており、かの宝塔が後世、場所を移し祭られた可能性は十分ありえる。

かの宝塔を過ぎると、第三の木戸の手前に縁を持った瓦葺きの堂が描かれる。この堂でまず目を引くのは、堂舎の傍らに置かれた四角い木造の箱であろう。箱の中には、あきらかに何かが入っている。この箱の中身は、「八坂法観寺塔参詣曼荼羅」によるとどうも石であったらしく、もしそうだとすると、今もこの地に残る経書堂について記した常庵龍崇の『寅闇四六後集』所収の次のような一文が、重要な意味をもつてくる。²⁵⁾

清水寺来光院、重造幹縁叙^{文亀}二年^{城州}愛后郡清水来光院、廻豊聡太子親染聖翰書妙経之霊場也、古来宰院者、繙卷聚石、每一枚写一字、々々俾人致一錢、以備補其、繇是俗号之曰経書堂、堂向嬰兵燹、石経亦成烏有焉、

経書堂では、近世以降もこの石に経文を書くという習俗を守り続けており、『洛陽名所集』巻之四（寛文四年開板）は「南むきなり、再念坂のぼりてそのまゝなり、本尊は聖徳太子を籠たり、此所にて住僧小石に経文をかき付侍りぬ」と記し、²⁶⁾『山州名跡志』巻二（元禄十五年）も「在三年坂上南向、（中略）小石ヲ集メ道俗男女ニ、法華経及諸大乘経等ヲ令書、潤水シテ諸職合霊ヲ弔ハシメ、自他得益之種因ヲ授玉フ、善巧方便ノ所也」と、この風俗について記している。²⁷⁾「清水寺参詣曼荼羅」が描く第三の木戸前の堂舎は、これらの点からして、経書堂の堂舎を描いたものと判定してまず誤りあるまい。

石に経文を書くという経書堂の習俗は、峠で死者に小石や樹枝を手向けた習俗のなごりともいわれ⁽²⁸⁾、本来、この堂は一種の境の堂としての性格を有していたのかもしれない。

D、第三の木戸から第四の木戸まで

この間には経書堂とよく似た形態の瓦葺の堂舎が一字描かれるだけである。この堂舎は地理的に見て、大日堂(真福寺)に比定できる。近辺には、天文三年(一五三四)に現在地に移転してきたというこの大日堂のほかには堂舎の存在は確認できず、第三、第四の木戸は大日堂の境の木戸を描いたものと推定しておきたい。

E、第四の木戸から子安塔・馬留まで

第四の木戸をくぐると画面は一転、清水寺門前の喧騒が描かれる。まず木戸のすぐ横、道の向う側に三軒見えるのが茶屋であることは、中央に釜をおいて亭主が茶を立てていることからすぐにわかる。しかし、この茶屋と向かい合って並んだ板葺の四軒の家屋には人影はなく、これがなにを描いているのかは、一見しただけではわかりにくい。谷に向かつて縁を張り出したこの四軒の室内には畳が敷きつめられ、その上には鼓・太鼓、冊子本、提・銚子などの品々が置かれる⁽²⁹⁾。これらの家々は、いかなる性格の家であったのであろうか。

想像するに、室内におかれた芸能・文芸・遊戯に関する諸道具は、これらの家々が遊びのための施設であったことを暗示するためのものである。時代は少しさかのぼるが、明応二年(一四九三)六月、清水寺に月参りした禅僧亀泉集証は帰路に「坂面茶屋」で「焼雲両片」と「抹月一盃」を喫すとともに、供の喝食に「桃実十顆」を振

舞っている⁽³¹⁾。また、天文十三年(一五四四)十一月、同僚の公家らと清水寺に参詣した山科言継も「清水寺茶屋」において「餅にて一盞」、遊興の時を過ごしている⁽³²⁾。これらの例から見ると、清水坂には一般庶民が立ち寄る粗末な茶屋のほかに、貴紳が腰を落ち着けて軽食を取ることのできる茶屋もあったことが知られ、ここに描かれた四軒の家屋は、まさにそのような貴紳向けの茶屋を描いたものと推定される⁽³³⁾。すなわち、「清水寺参詣曼茶羅」は、この地区に一般庶民向けの茶屋と、貴紳向けの二種類の茶屋を描いているわけであり、第四の木戸が大日堂の領域を区切る木戸とあるとともに、貴賤の参詣者で賑わう門前町への入り口の木戸でもあったことが確認できる。

F、門前から音羽滝まで

仁王門の横を抜けて音羽滝に至るこの道には、途中で木戸が一所あるだけでこれといった地物はなにも配されていない。道の中央よりやや北に見える木戸は、場所からして道の坂下に描かれた僧侶の居住地区への通路を区切るために立てられた木戸であろう。また、本堂に通じる道が見えるが、これは僧侶の居所地区と本堂とを結んだ通路と考えられる。この道には音羽滝に向かう参詣者のほか、音羽滝からの水汲みが描かれており、参詣者としてのみならず、生活道としても機能していた道であったことがうかがえる。

以上、「清水寺参詣曼茶羅」に描かれた参詣道の地物を検証することによって、この参詣曼茶羅が清水坂に登るにしたがい変化していく風景を、かなり忠実にかつまた象徴的に描いていたことがあきらかになったものと思う。これらを表にして示すと図1のようになる。参詣道に配された地物のなかには、二層の堂舎や宝塔のように、

表1 参詣道の地物

	地物	ゾーン
A地区	五条橋	A9、C9
	法城寺	B8、B9
	大黒堂	B9
	茶屋	A9
	[卒都婆] [石塔]	B9 B9
B地区	木戸(1)	C9、D9
	長棟堂	D8、E8
	小屋	D8、D9
	家屋	D9、E8、E9、G8
	[愛后寺] 六波羅蜜寺 (門、塀、地藏堂)	F9 F9、G9
C地区	木戸(2)	F8
	三本卒都婆	E7
	宝塔	D7
	経書堂 (堂舎、経石箱)	C7、D7
D地区	木戸(3)	B7、C7
	大日堂	B7、C7
E地区	木戸(4)	B7、C7
	茶屋	B7
	茶屋	A7、B7
F地区	木戸(5)	D5

注1) ゾーンは、カラー写真(図2)の範囲を示す。

注2) 比定のむずかしい地物は、[]でくくった。

二、参詣道の人物

参詣道に描かれた人物の図像は、地物の図像との関係でいえば、あきらかに二つに分類できる。地物の図像と密接に結び付いた図像と、そうでない図像の二つである³⁴⁾。参詣道においては、前者は基本的にはこの参詣道沿いを居住あるいは生業の場とするいわゆる「居住者」の図像によって占められており、これに対して後者は清水寺参詣の

現地比定および文献によっても、それが何であったかを確実に比定できないものがないではない。しかし、他の例をもつてすれば、それらを含めて当時の人々には、参詣道の地物の大半は一瞥しただけで容易に認識可能のものであったはずである。もちろん参詣曼荼羅はすべての参詣道沿いの地物を描いていたわけではなかった。描かれた図像が、作者によって選択されたものであったことはいうまでもないが、ただ、その選択と画面への配置は予想以上に適格であり、参詣曼荼羅を見る人に、それぞれの「場」の情景とその統合としての参詣道の風景を喚起させるには、十分なものであったといえる。

そして、このような「場」の情景に、より臨場感を付与し、さらには地理的な位置関係を明示する目的で描き込まれたと考えられるのが、いくつかの人物の図像である。次にそのような地物と組み合わせられた参詣道の人物の図像について見ていくこととしよう。

ためにこの道を行く一般の参詣者―「参詣者」の図像がほとんどすべてこれにあたる。この地物と人物の図像の関係は、寺内に入るとまた異なった様相を呈するのであるが、とりあえずここでは地物と密接に結び付いた「居住者」の図像について見ていくこととしたい。地物との組み合わせられた「居住者」の図像は、参詣道の四つの部分では、それぞれ次のように整理することができる。

- A、五条橋
―大黒堂の勧進僧
- B、第一の木戸から第二の木戸まで―五条橋上の犬神人
「長棟堂」前の癡者
- C、第二の木戸から第三の木戸まで―(該当の図像なし)
- D、第三の木戸から第四の木戸まで―(該当の図像なし)
- E、第四の木戸から門前まで
―茶屋の亭主と客引き
- F、門前から音羽滝まで。
―水汲み

これらの「居住者」の図像を、地物の図像との組み合わせのなかで簡単に整理しておく、以下のようになる。

大黒堂の勸進聖 中島の大黒堂において、五条橋保全のための勸進を行っていたこの勸進僧が、清水寺の成就院に所属していたことについてはすでに述べた。大黒堂は天正十七年（一五八九）の五条橋の架け替えによっていったんは廃絶するが、のち近世中期に至り、成就院によって清水寺内に復活。この大黒堂は幕末まで本堂に通じる轟門前に所存する。なお、現在、本堂外陣横に祭られている巨大な「出世大黒像」は、かつて轟門前に祭られていた大黒僧の系譜を引く像と考えられる。³⁷⁾

五条橋上の犬神人 五条橋上に行く二人が犬神人であることは、覆面に柿色の衣という出立、さらには肩からかけた弓の弦を収めて赤土器などからあきらかである。これは坂者とも呼ばれた犬神人が、洛中に弓の弦を行商に行く姿を描いたものと思われる。「八坂法観寺塔参詣曼荼羅」でも、洛中に向かう二人の犬神人が五条橋上に描かれており、清水坂から洛中に行商に出かける犬神人の図像が、パターン化していたことが知られる。³⁸⁾

「長棟堂」前の癪者 「長棟堂」前の小屋の二人が、その出立や「八坂法観寺塔参詣曼荼羅」に描かれた同種の図像から癪者と推定できることについては、かつて詳しく考察したことがある。³⁹⁾ 癪者の図像は、その背後の「長棟堂」と不可分の形で、ここに配されていたわけであり、その意味で地物ときわめて密接に結び付いた人物の図像であったといえる。

茶屋の亭主と客引き 三軒の茶屋には、それぞれ中央に釜が置かれ、一番奥に亭主が座って茶を立てている。三軒のうち右の二軒の亭主

は剃髪した男のようで、左隅の一軒だけが女の亭主に描かれている。店の前に出て参詣人に声を掛けいるのは、客引きの女であろう。

水汲み 音羽滝から水を汲んで運ぶ男女の図像が、滝から仁王門の横まで描かれる。この水汲みは、中世歌謡に「地主の桜は 散るか散らぬか 見たか水汲み 散るやら散らぬやら 嵐こそ知れ」と歌われた人々であるが、⁴⁰⁾ 彼らが音羽滝の水を何のためにどこに運んでいたかを、参詣曼荼羅の図像は期せずして暗示している。すなわち、水桶を頭にした頭巾の女の一人は、音羽滝から本堂下の道を通り仁王門横を抜けて、いままさに門前の賑わいに差し掛からんとする姿で描かれている。この図像の配された位置から見て、彼ら水汲みたちが最終目的地としていたのは、門前の茶屋であったと見てよい。音羽滝は、清水寺の草創に関わる寺内第一の聖地であるとともに、その水が「金色水」として不思議な力を有していたことはつとに知られていたところであった。⁴¹⁾ 水汲みたちの手によって音羽滝から運ばれた霊水は、門前の茶屋で参詣者の喉をうるおすこととなっていたと考えるまちがいあるまい。

以上、ここに取り上げた五組の「居住者」が、いずれも清水坂を生活の場としていた人々であったことは、その図像の向きからも容易にうかがうことができる。一般の参詣者の図像がほとんど例外なく坂を清水寺にむかつて上って行く姿に描かれているの対して、「居住者」の図像は、癪者や茶屋の亭主のように道に面するか、もしくは犬神人や水汲みのように参詣者に逆行する姿で描かれているからである。

参詣道の「居住者」の図像が、該当の地物の図像と組み合わせられ、参詣道のそれぞれの部分において、独自の「場」を形成、全体

として参詣道の空間を構成していたことがあきらかとなった。参詣道においては、地物とともに人物の図像が「場」の表現に大きな役割を果たしていたわけであり、参詣道の空間構成といった観点からこれを見た場合、最初に指摘したように、寺内に較べて参詣道の空間全体が著しい圧縮をうけているにもかかわらず、その空間を構成する「場」だけを取り上げれば、なんら圧縮の影響をうけていない点は改めて確認しておく必要がある。

これは参詣道においては、空間の圧縮という案内図としては致命的ともいえる欠陥を少しでも補うため、「場」の表現には細心の注意が払われていたことを示している。すなわち空間は著しい歪みを呈しているにもかかわらず、これを構成する個々の「場」が適格に表現されているというこのような参詣道の画面構成からは、参詣曼荼羅をたんなる景觀図(名所図)に止めず、なんとか案内図として機能させようとした作成者の苦心の跡が読み取られなければならないものとも考える。

三、寺内の地物

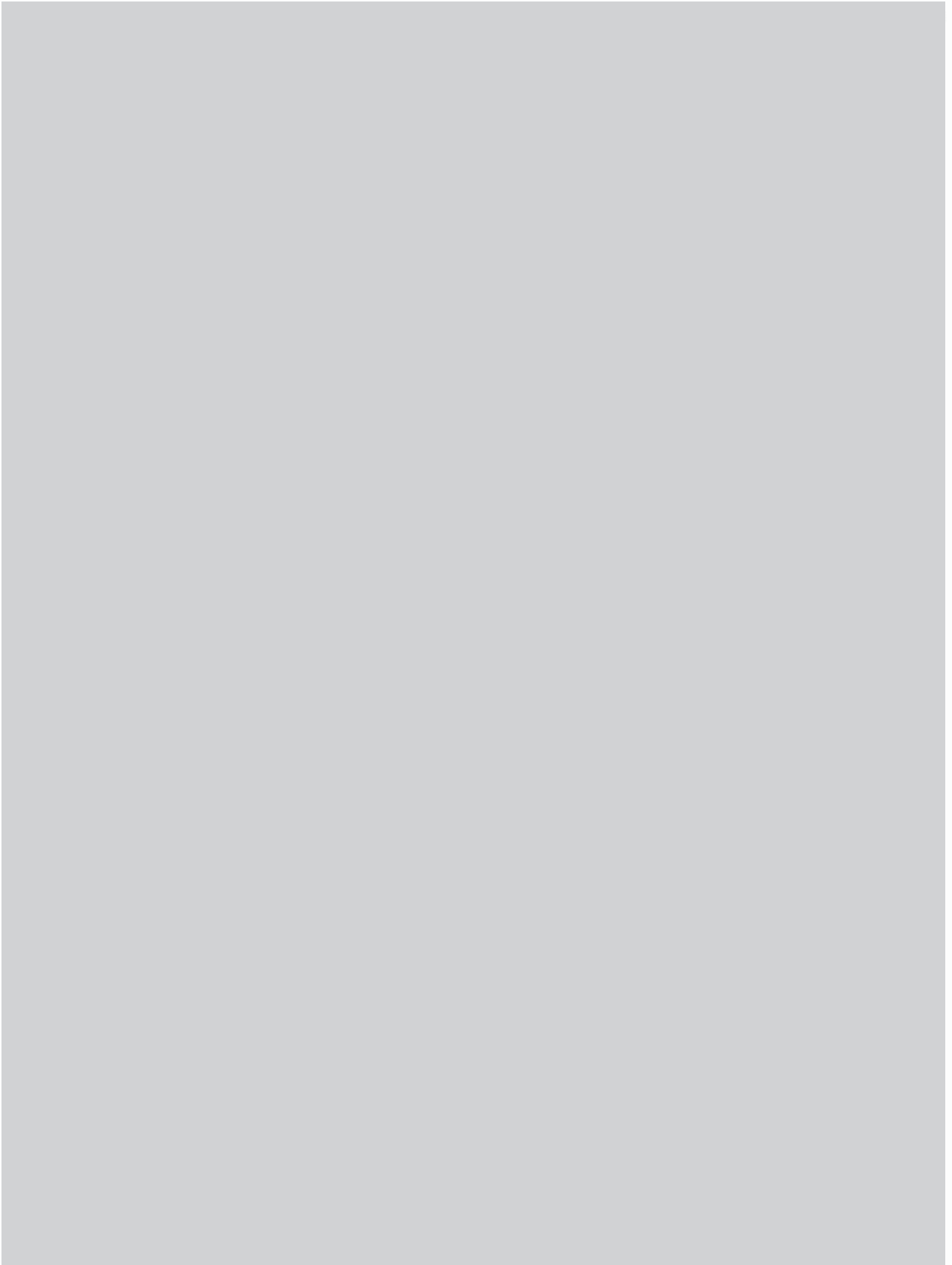
寺内の地物の図像が、参詣道の地物の図像と基本的に異なる点は、その大半が現在もそのままの形で残ることにある。清水寺は寛永六年(一六二九)九月の火災で堂舎の多くを焼失しており、現在の伽藍は再建後のものである⁽⁴⁾。それにもかかわらず、焼失前の姿を描いた「清水寺参詣曼荼羅」の寺内の地物と、現在の寺内の地物との間に大きな異同が見られないことは、再建が焼失以前の姿への忠実な復元を目標として実施されたことを物語っている。

聖域の重要な存在条件の一つに、その不変性があつた。聖域は常に始源のままで維持されることによつてはじめて聖域と認められたのであり、寺内の地物が度重なる天変地異にもかかわらず、そのつど旧に復しているのは、まさにこの存在条件によるものといえる。とはいえ長い間には、寺内の地物がまったく変化しなかつたわけではむろんない。ここでは寺内の地物の図像を現存の地物と比較し、大きく変化していないものについては一覧(表2)で示すにとどめ、A、姿を消してしまっている地物、B、その位置を移動している地物、C、その形態を著しく変化させている地物、これら三つについて、その比定考証を行いたい。

A、現在は姿を消してしまっている地物

住坊 清水寺の僧侶が住んだ住坊で、近世には「六坊」の名で呼ばれた六宇の坊舎が西門の西南に所在した⁽⁴⁾。「清水寺参詣曼荼羅」は該当位置に、向かいあつた四字の板葺の建物と、この一画に入る門・階段を描く。他の絵画資料との比較からしても、これはのちに「六坊」と呼ばれた住坊を描いたものと考えられる。幕末の絵画資料には、いまだ「六坊」の姿は描かれており(挿図1参照)、その消失は近代に入ってからと推定される。

勸化所 本堂への参詣者に奉加錢を請うための施設で、清水寺においては勸進を担当した成就院が本堂内陣に入ることを許されなかつたため、本堂への入り口である轟橋の傍らに設置されていた施設⁽⁴⁾。「清水寺参詣曼荼羅」では轟橋の傍らに板葺きの小さな小屋として描かれる。小屋からは勸進僧が杓を差し出し、参詣者に奉加を請うている。勸化所も幕末までその存在を確認でき(挿図1参照)、これまた



挿図1 音羽山清水寺（『花洛名所図会』）

表2 寺内の地物

地物	ゾーン	地物	ゾーン
*泰産寺 (勸化所、子安塔、観音堂、玉垣)	A6、B5、B6、 C6	回廊	E4
馬留	A6	本堂 (堂舎、舞台)	F3、F4、F5、 G3、G4、G5
仁王門	A5	地主神社	E2、F1、F3、 G2
西門	B4	(本殿、拝殿、摂社、玉垣)	
春日社 (社殿、玉垣)	A5	めくら石	E2、F2
鹿間塚	A4	*鐘突堂 (堂舎、鐘)	G2
*六地藏	A2、A3	手水鉢	G3
[堂舎]	A3	板橋	G3
三重塔	B3、B4	*宿所	G2、H2、I2
*成就院 (塀、坊舎、庭)	B2、B3、C2	地藏堂	H3、I3
*田村堂	C2、C3	釈迦堂	I3、J3
*朝倉堂 (堂舎、舞台)	D2、D3、E2、 E3	阿弥陀堂	I4、J4
*勸化所	C4、D4	千手堂 (堂舎、舞台)	I5、I6、J5、 J6
*住坊(六坊) (門、坊舎)	C5、C6、D5、 D6	*多宝塔 [堂舎]	J6
梟の手水鉢	C4	音羽滝	I7
轟橋	D4	滝宮 (玉垣、鳥居、拝殿、拝所)	H7、H8、I7、 I8、J7、J8
中門(轟門)	D4	[坊舎]	I4、I5

注1) *印は、本文で検討を加えた地物を示す。

注2) 比定のむずかしい地物は、予想を [] でくくった。

近代に入って姿を消したものと考えられる。

宿所 本堂の北東、「清水寺参詣曼荼羅」では画面の右上に板葺きの三宇の建物を描く。これらすべてが宿所であったとは思えないが、このあたりにいわゆる堂舎があったという記録はなく、とりあえず寺内の宿所と推定しておきたい。⁽⁴⁶⁾ これらの地物がいつ姿を消したかは定かではない。近世の絵画資料には、ほとんどその存在を確認できず、かなり早い時期に消滅したものと推定される。

多宝塔 千手院の南に、多宝塔とこれと対をなすと思われる堂舎が描かれる。かつて千手院は多宝塔であったという伝承があり、この図像はそのような伝承に基づき描かれたものであろう。該当地に多宝塔が実在したという記録はなく、この図像は伝承を根拠に描かれた可能性が高い。

B、現在はその位置を移動している地物

泰産寺 参詣曼荼羅が描くように近代まで馬留の前に道を隔ててあった寺院。塔と観音堂からなり、明治四十三年(一九一〇)に本堂からは約二百メートルほど南、清水寺から清閑寺にいたる道の西方に移築され、現代に至っている。

春日社 馬留の東、仁王門のすぐ北に描かれる社は、春日社を描いたものと推定されるが、同社は現在はいくよりや北東の位置に移されている。また、現在は玉垣はなく、社殿だけが残る。移動の時期は、泰産寺と同じく

近代以降と推定される。

六地藏 三重塔の北、画面の左隅に六地藏が描かれる。現在、延年寺谷に所在する寺内の墓地に安置される六地藏がこれにあたると思われるが、移動の時期は定かではない。近世にはすでに該当地には見えず、描かれている場所からは、かなり早い時期に移動されたものと推定される。

鐘突堂 本堂の東に描かれている鐘突堂は、現在は仁王門を入れてすぐ左手に所在する。移築の時期は、寛永の再建時と推定される。⁽⁴⁸⁾

以上が、現在ではその位置を移動してしまった寺内の地物の主なものである。このほか次に触れる成就院や田村堂も厳密に言えば、若干、場所を移動させているが、これらの地物は、場所の移動もさることながら、その堂舎の形態の変化がより重要な意味を持つと考えられ、次のCで取り上げることとした。

C、現在はその形態を著しく変化させている地物

寺内の地物の画像で、現在と著しい相違を見せるのは、田村堂(本願院・開山堂)、成就院、朝倉堂(法華三昧堂)の三つの建物である。

田村堂 田村堂とは、開基の坂上田村麻呂らを祭った堂で、参詣曼荼羅では三重塔の右上に見える堂舎がこれに該当すると考えられる。この堂が田村堂であることは、その所在地が現在の田村堂とほぼ同じであること、および現在の田村堂にも参詣曼荼羅の描くところと同じく堂内に坂上田村麻呂とその妻高子、行叡、延鎮といった縁起に関わる四人の像が安置されていることなどから判定できる。

ただ、参詣曼荼羅では四人の像とともに、正面に阿弥陀仏像が安置されているが、現在の田村堂には、四人の像が安置されるだけで、

本尊は安置されていない。また、参詣曼荼羅の画像では、建物がやや小さくその背後の堂舎の付属施設のように見える点も、現在の独立した建物の田村堂とは異なっている。

成就院 成就院は清水寺における勧進僧の住坊で、田村堂の背後に描かれたひとときわ大きな建物がこれに比定できる。理由はその所在地が現在の成就院の位置とほぼ一致すること、および建物内に大きな庭が描かれていることによる。成就院は古くよりその庭園をもつて知られていた。⁽⁴⁹⁾

なお、この成就院の建物は、寺内の坊舎でもっとも大きく描かれ、構造も入り口に白壁の二階屋を上げるなど、「清水寺参詣曼荼羅」の数多い建物の画像のなかでもひとときわ目を引くが、これは、当時、成就院が寺内にあつてどのような位置を占めていたかを、それなりに暗示しているものと考えられる。⁽⁵⁰⁾ また、時代は少しさかのぼるが、亀泉集証は、清水寺参詣の都度、成就院を訪れここで茶を飲み、時には「宴」に興じており、⁽⁵¹⁾ 当院が彼ら禅僧の遊興に耐える規模の施設を有した建物であつたことがうかがえる。

朝倉堂 永正年間(一五〇四―二二)に越前の朝倉貞景の奉加によって創建されたところから、朝倉堂の名で呼ばれた堂舎で、現在は回廊のすぐ北に建つ。参詣曼荼羅は現在地と同じ所に舞台をもつた堂舎を描くが、場所からして、この建物が朝倉堂と推定される。

ただ、その姿は現状とかなり相違している。まず第一に堂舎の所在する地形であるが、参詣曼荼羅では、堂舎は小丘陵状の上に建つように描かれる。現在、回廊の北はまったくの平坦地で段差はない。第二に参詣曼荼羅の建物には舞台が付属しているが、平坦地に建つ現在の朝倉堂には当然のことながら舞台はない。

このように現状とは著しい相違点があるにも関わらず、この建物を朝倉堂と比定したのは、次のような理由による。

まず第一の小丘陵であるが、このあたりに小丘陵がかつて存在したことは、いくつかの絵画史料によって裏付けることができる。すなわち参詣曼荼羅に先行して作られた『清水寺縁起絵巻』巻下(東京国立博物館蔵)は、田村堂のすぐ横に地主神社に通じると思われる登り口を描いており、桃山期の複数の「洛中洛外図」も、舞台こそ持たないものの、高台の上に朝倉堂を描いている。この小丘陵が取り崩され、現在見るような平坦地になったのは、寛永の再建時のことのように、工事中に地中から観音像が掘り出され「掘り出し観音」の名で人々の信仰を集めたことが記録に残る。⁵⁵なお、寛永以降の「洛中洛外図」は、朝倉堂をすべて平坦地に描いている。⁵⁴

次に朝倉堂の舞台であるが、これについては、現在のところ参詣曼荼羅の図像以外にその存在を明確に証明する史料は、見当たらない。ただ、『一水記』永正十八年(一五二二)六月十三日条に、朝倉堂での酒宴について「於法華堂有御酒宴、雨後月光清潔山色添景、近比之興也」と見えるのは、その舞台の存在を裏付ける傍証史料となるかもしれない。季節が夏であったことを思いあわせれば、鷲尾隆康らが愛でた「雨後月光清潔山色添景」という情景は、舞台から見た情景と想定することではじめて臨場感のあるものとなるかとも思われるからである。

なお、朝倉堂には、本堂の本尊と同じ千手観音が安置されており、脇侍も本堂と同じ毘沙門天と地藏が祭られていた。本堂安置の本尊が秘仏であるため、清水寺には本尊の身代わり像が数多く残るが、朝倉堂の本尊もまたそのような身代わり像の一つとして作られたと

考えることもできる。ただ、朝倉堂の場合、たんに本尊のみならず、脇侍までもが本堂の像を模してつくられているところに大きな特徴があり、創建当初の朝倉堂に舞台が付属していたことを含め、この堂が第二の本堂ともいふべき性格を有していたことについては、別稿で論じた通りである。⁵⁶

以上、参詣曼荼羅に描かれた寺内の地物のなかで、現在までに形態が大きく変化したものを見てきたわけであるが、その変化の大半は、寛永の再建時と明治の近代化の時期にもたらされたものであったことがあきらかとなった。寛永の再建時に変化が生じた地物としては、宿所、六地藏、鐘突堂、田村堂、成就院、朝倉堂を、また明治以降に変化したものとしては、住坊、勧化所、泰産寺、春日社などの地物をあげることができるのである。このうち明治以降の変化については、近代に入って廃仏毀釈といった激しい社会変動のなかでの出来事であり時代も新しく、これらに関してはここでは触れない。いっぽう寛永の再建時の出来事については、大半の地物に変化しなかったにもかかわらず、なぜいくつかの地物に限って、その形が変化したかについては考えておく必要がある。

寛永の再建時、形態を著しく変化した地物を一覧すると、田村堂、成就院、朝倉堂の少なくとも三件に関しては、共通する点があることに気が付く。それはこれらの地物がいずれも清水寺本来の建物ではなく、少なくとも中世後期から近世にかけては、同寺の勧進部門を統括していた歴代の成就院によって管理されていた建物であったという点である。成就院は、文明年間(一四七九―一八七)に伽藍再建のために清水寺に住み付いた勧進僧願阿弥に始まる。⁵⁶これら建物は基本的には、この願阿弥の入寺以後に成立したものであり、田村

堂以下の地物は、清水寺本来の聖域を構成していた不変の地物ではなかったわけである。寺内の地物を不変・可変の二つに分けた場合、これらはあきらかに後者に属した地物であり、寛永の再建時の形態の変化は、まさにこれらが清水寺本来の地物でなかったがゆえにもたらされたものであったといえよう。

四、寺内の人物

①寺内の居住者

寺内の人物の図像も、参詣道の場合と同じく、地物と密接に結び付いた図像と、そうでない図像の二つに分けて考えることができる。しかし寺内の人物の図像は、参詣道の地物の図像とは異なり、前者を「居住者」、後者を単純に「参詣者」と規定することはできない。なぜなら寺内のもっとも主要な「居住者」である僧侶についてみれば、そのすべてが必ずしも地物の図像と密接に結び付いているとは、到底いえないからである。また「参詣者」の図像も、参詣道の場合とは異なつて、地物の図像と無縁でなく、逆にこれと密接に結び付いたものが少なくない。つまり寺内の人物の図像は、参詣道の人物の図像とは違い、地物の図像との対応関係だけで、これを単純に「居住者」「参詣者」に分類することはむずかしいのである。このような寺内と参詣道における人物の図像の在り方の違いは、両者の空間構成の相違に基づくものと考えられるが、この点については、のちに改めて考えることとし、ここでもやはり寺内の「居住者」の図像を検証していくことから始めよう。

寺内の「居住者」としては、まず清水寺所属の僧侶・比丘尼があ

げられる。寺内には数多くの僧侶・比丘尼の図像が描かれるが、それらの多くは、西山氏の言葉を借りれば「稚児に先導される僧侶」に代表されるような「参詣曼荼羅一般に通底する普遍的な図像」としても位置付けられる図像であった⁵⁷。ただ、これらの図像は確かに他の参詣曼荼羅に同じ姿で登場するとしても、決して任意に画面にはめ込まれてはいたわけではなかった。「稚児に先導される僧侶」を例にとれば、該当の図像は「清水寺参詣曼荼羅」では本堂の回廊に配されており、いままさに本堂での仏事を終えて住坊に帰らんとするその姿は、かの「場」にふさわしい図像と見ることもできる。「普遍的な図像」であつても、地物の図像と組み合わせられて独自の「場」を形成することがあつたことを、「清水寺参詣曼荼羅」の「稚児に先導される僧侶」の図像は物語っている。また、その意味で「普遍的な図像」は、地物との関係を無視して正確に理解できないともいえる。

「清水寺参詣曼荼羅」は寺内の僧侶・比丘尼を、(1)袈裟を着用した僧侶、(2)着物に袴を着した僧侶、(3)勸進の杓を差し出すいわゆる勸進僧侶・比丘尼、の三種に描き分けている。

このうち(1)の僧侶は、住坊・朝倉堂の前に各一人、回廊に一人の計三人を数える。三人は服装・従者によつて、さらにランク付けされていたようで、色のついた袈裟を着し稚児と従者の僧を従えた回廊の僧、同じ墨染め衣で稚児を従えた住坊の僧、従者を従えない墨染めの衣を着した朝倉堂の僧、の順でそのランクを仮定することも可能である。むろん僧侶に従う稚児は、やはり寺内の居住者のうちに数えておく必要がある。

次に(2)群の袴姿の僧侶であるが、これも三人を数える。一人

目は成就院の門前で掃除する僧、二人目は回廊を行く高僧に従う僧、そして、三人目は西門から音羽の滝に向かう坂道を桜の折枝をもつて駆ける僧である。これら三人の僧は、その出立から判断していずれも下法師を描いたものと推定される。このうち成就院の「門前で掃除する僧」は、他の参詣曼荼羅にもしばしば登場しており「参詣曼荼羅一般に通底する普遍的な図像」とも位置付けられる図像である。⁸⁸ただ、この「門前で掃除する僧」は、他の参詣曼荼羅でも、本願坊やこれに類する住坊の前に配されており、それ自体が独自の「場」を担った図像であつたらしいことが知られる。

最後に(3)群の杓を持った勸進僧侶・比丘尼であるが、勸進僧は轟門前の「勸化所」、阿弥陀堂・釈迦堂に、また勸進比丘尼は子安塔・千手院に各一人ずつが描かれる。中世後期、清水寺の勸進は成就院の手によって執行されて⁸⁹おり、これら勸進聖・勸進比丘尼は、成就院の傘下にあつて活動していた勸進僧・勸進比丘尼と推定される。彼らは各堂に本来欠かせない図像であり、寺内においては、地物ともっとも密接に結び付いた「居住者」の図像であつたといえる。

以上、寺内の「居住者」の図像の検証によって、寺内の場合においても、その図像がそれなりに地物と結び付いて独自の「場」を形成したことがあきらかとなつた。僧侶の図像に限つていえば、その地物との結び付きは、参詣道の場合ほど、重要な役割を果たしていないものが多いが、それは地物の図像が、それだけであまりにも明確な「場」を提示していたことによるのであろう。すなわち堂舎の図像は、正確な位置関係のもとに大きく一見してそれとわかるように描かれており、わざわざ「居住者」の図像をこれに加えて配する必要はなかつたのである。案内図のための「場」の形成という点か

らえば、寺内では多くの場合、地物の図像だけで十分だつたわけである。

しかし、寺内において、それぞれの「場」は地理的な案内のためだけに形成されていたのではなかつた。それよりも寺内の「場」にとつて重要だつたのは、その「場」がいかなる形で聖域の一部として存在していたかを提示することにあつた。そして、この点で寺内の「場」において、より重要な役割を担わされていたのは、「居住者」の図像よりも、地物に結び付いた「参詣者」の図像であつたと考えられる。次に地物と組み合わせられ配された寺内の「参詣者」の図像について見ていくこととしよう。

② 寺内の参詣者

寺内は実にさまざまな種類の「参詣者」の図像で埋められている。その大半は「参詣曼荼羅一般に通底する普遍的な図像」であるが、それら一般の「参詣者」の図像とは別に、あきらかに寺内の地物と組み合わせられて配された「参詣者」の図像が存在する。そのような地物との関係で当面、解釈が可能な「参詣者」の図像としては、(1) 泰産寺で「柱」に祈りを捧げる女、(2) 本堂および朝倉堂で祈る男女、(3) 音羽の滝と本堂の間を往復する願人、(4) 地主神社の前の石に向かつて歩む男、の四つを指摘することができる。

泰産寺で「柱」に祈りを捧げる女 この女については、泰産寺内に見える「柱」が何であるかを探っていくことからはじめなければならぬ。参詣曼荼羅の図像で見える限り、それは棒状もしくは柱状のなにかであるとかいいたくないような物体に見える。女はその「柱」に手を合わせて祈っているのである。現在の泰産寺内には、これに類似する物体はまったく確認できないし、また類似の習俗も存在し

ない。泰産寺がその名の通り、安産に利益のある寺（観音堂）であったことを思えば、女は安産に関わってなんらかをこの「柱」に祈っているとは推定するのがもつとも妥当であろう。では、この「柱」は具体的にいかなるものであったのであろうか。

公家の山科言継は子供が無事生まれたのち、子安観音にお礼参りに訪れたときの様子を、その日記『言継卿記』に次のように記している。

〔天文十三年三月七日条〕

於子安観音堂柱一本建之、阿子誕生之時、立願也、無沙汰曲事也、
〔天文十七年四月二十五日条〕

以次子安之観音に柱一本十足了、故宗永誕生之時之立願、于今無沙汰也、

言継が安産のお礼参りに、一度ならず二度までも「柱一本」を立てていたことが、この記事から知られる。参詣曼荼羅に描かれている「柱」は、言継のような安産のお礼参りの人々によって立てられた「柱」であったと見てよからう。安産祈願に訪れた人々は、先人が立てた「柱」に祈り、祈りが通じると自らもこれを立てることとなっていたのではなからうか。「柱」に祈る女の姿は、現在は絶えてしまった泰産寺における安産祈願の習俗を、今に伝える貴重な図像と見てよい。そして、その点で、この祈願する女は、泰産寺に固有の図像といつてよからう。なお、中島本では女とともに子供を背負った従者が塔に祈っているが、これは安産のお礼参りの姿を表現した人物の図像と考えられる^⑥。

本堂および朝倉堂で祈る男女 本堂と朝倉堂の前では、男女のペアがほとんど同じように祈りを捧げる姿態で描かれる。肩衣姿の男と

被衣姿の女が、それぞれの堂に祈る姿は、両堂に安置された仏への信仰を抜きにして理解できない。

永正年間（一五〇四—二一）に創建された朝倉堂は、本堂と同じく一面千手観音および毘沙門天・地藏を祭る。本堂と朝倉堂の前で祈る男女がほとんど同じ姿態で描かれているのは、祈りの対象が同じであり、さらには祈りの内容が同じであったことを示していると見てよい。では、彼らは観音に何を祈っていたのであろうか。

清水寺の観音が子授けに靈験あらたかであったことは、つとに知られている。説教『信徳丸』には、子供を授かることを願って本堂の本尊に祈願する長者夫婦の姿が生き生きと描かれており、本堂と朝倉堂の前で手を合わす男女は、かの長者夫婦のように子宝の授かることを祈る夫婦を描いたものと判定したい。

音羽の滝と本堂の間を往復する願人 音羽滝と本堂との間を三十三往復する「願人」の姿を描く。この音羽滝での「三十三のこり」^⑦は、中世にはすでに盛んに行われており、町田家旧蔵本を始めとするいくつかの「洛中洛外図」にもその姿は見えている。本堂と音羽滝という寺内でももつとも聖性の高い地物に関わる人物の図像だけに、願人の図像は、その白装束はもとより彼らが手にする「しきみの枝」まで、詳細に描き込まれている^⑧。上杉本「洛中洛外図」が願人の図像を、実際はありえない滝宮に尻を向けた姿に描くのと比較すれば、その表現の正確さがうかがわれよう。

地主神社の前の石に向かつて歩む男 地主神社の本殿前に置かれた二つの石の間を目を閉じて歩む男の図像が描かれる。この二つの石は、世に「めくら石」と呼ばれたもので、一方の石より他方の石へ目を閉じて歩くことができれば諸願成就するとも、また目を閉じて

両方の石から歩みよつても決して行き当たらないとも伝えられた石であった。⁽⁶⁵⁾「清水寺参詣曼荼羅」の男は目を閉じて右から左に歩んでいるように描かれており、諸願成就を願つての行為であつたらしいことがわかる。なお、この二つの石は、現在は目を閉じて一方から他方に行き着けば恋が成就する恋占いの石として宣伝されている。

以上、明確に地物と結び付いていたと考えられる寺内の「参詣者」の図像について簡単に見てきたわけであるが、いずれの図像もが聖域内におけるそれぞれの「場」の在り方、しいては信仰の在り方を極めて象徴的に表現していることがあきらかになつたものと考えられる。

ここにあげた四組の「参詣者」の図像は、期せずして、本堂、朝倉堂、泰産寺、地主神社、音羽滝と、すべて清水寺においてその信仰の根幹をなす堂舎や滝と組み合わせられているが、これは決して偶然ではあるまい。

案内図のための「場」の形成という点からいえば、すでに触れたように、寺内では多くの場合、地物の図像だけで十分その機能は充足していた。これら四組の「参詣者」の図像は、参詣道の場合のように、案内図として「場」を充実させる目的でそれぞれの「場」に配されていたわけでは決してなかつた。

四組の図像は、いずれもそれぞれの「場」がいかなる信仰によって支えられているかを示すために、該当の地物と組み合わせられ配置されていたと考えられなければならない。すなわち、地理的な案内図の機能は、寺内においては地物の図像配置だけで十分に事足りており、寺内でこれら「参詣者」の図像に期待されたのは、その「場」がいかなる形で聖域の一部として存在していたかという、いわば信

仰的な案内図としての「場」をより適確に表現することであつたといえよう。

五、「場」と関わりのない「参詣者」の図像

「参詣者」と「居住者」の図像のありかたが、参詣道と寺内では、あきらかに異なつていることが、前節までであきらかとなつた。本節では、参詣道と寺内を問わず、また地物の図像にも基本的には関わりなく存在した「参詣者」の図像について、考えていくこととしたい。

数ある「参詣者」の図像で厄介なのは、「場」や他の図像とはほとんど関係なく、清水寺への参詣者であることそれ自体に、固有の意味を有するものがあることである。一例をあげよう。第一の木戸のほぼ真下に、二人連れの鉢叩きが描かれる。他の参詣曼荼羅にはほとんど描かれないこの鉢叩きの図像は、徳田和夫氏によれば、彼ら鉢叩きが清水寺の十一面千手観音を「斎き祀る仏」としていたことを背景として、理解されなければならないものという。⁽⁶⁶⁾鉢叩きの図像は、たんなる「参詣者」ではなく、彼らの清水寺信仰を暗示するものとして、特に意図的に図内に配されていたと理解されなければならないのである。

この図像は意図的に配された図像であつたという点においては、一般の「参詣者」の図像とあきらかに異なるが、それが特定の「場」を形成する目的をもつて配された物でなかつたという点では、本堂の前で祈る男女の「参詣者」とも性格を異にしているといわなければならない。鉢叩きは、その清水観音への信仰という視覚化のむず

かしい要因によって、ここに登場してきているのであり、彼らが「場」に関わりなく、画面上に存在しているのも、まさにそのためであった。

「場」との関わりがないため、この鉢叩きの画像を一般の「参詣者」の画像から識別する作業は決して容易ではない。ただ、多くの「参詣者」が、各種の参詣曼荼羅に登場するいわゆる「切り貼り」的に配列された画像であるとすれば、それらの画像をすべて除外したあとに残された画像こそが、これに該当する画像である可能性が高いとはいえよう。つまり参詣曼荼羅一般に登場しない、特異な「参詣者」の画像は、とりあえずすべて固有の意味をもつ画像ではないか疑ってみる必要があるわけであり、通絵図的な画像分析は、このような画像の分別において、もつとも効果を発揮すると思われる。

そして、そのような観点から清水寺への参詣道に描かれた「参詣者」の画像を今一度見直すと、あきらかに一般の「参詣者」とは異なり、また他の参詣曼荼羅にはほとんど登場しない特異な「参詣者」の画像が、鉢叩きのほかにいま一つ発見できる。第二の木戸から第三の木戸にかけて描かれた、騎馬の二人の人物とこれに従う人々の行列である。ここに描かれたような行列の画像は、鉢叩きの場合と同じく、他の参詣曼荼羅にはあまり例がない。では、この行列の画像が、固有の意味をもつ「参詣者」の画像であったとすれば、それはどのように解釈できるのであろうか。

該当の行列は、騎馬の人物二人を核にした二つのグループからなる。先に行くグループは、騎馬の一人を中心として、先駆けに総髪の人物が立ち、太刀持ち、槍持ち、長刀持ちがこれに付き従う。また、後ろのグループも従者が一人多いだけで、その隊列の構成はほ

んど変わらない。行列の構成から見ても、これがたんなる一般の「参詣者」の参詣風景を描いたものでなく、なんらかの本格的な公式の行列を描いたものらしいことはすぐに了解される。しかし、描かれた画像からだけでは、この行列固有の意味を正確に探り出すことは、かなりむずかしい。

ところがここにその手掛かりを与えてくれるいま一つの画像がある。中島家本の「清水寺参詣曼荼羅」に描かれた行列の画像である。中島家本は、清水寺本とほぼ同じ場所にやはり二つのグループからなる行列を描くが、その行列の構成は清水寺本と若干異なっている。すなわち、中島家本の行列では、先に行くのが騎馬を中心としたグループである点は清水寺本と同じものの、後続のグループは騎馬ではなく一基の輿を中心に構成されている。そして、かの輿の前後には合わせて八人も従者が付き従っているのである。

中島家本のこの仰々しい行列を見て、すぐに想起されるのは、文明十六年（一四八四）六月、再建なった本堂への本尊遷座の法会に参向した勅使の行列である。次に引用したのは、息子の元長が勅使として清水寺に参向した甘露寺親長が、日記『親長卿記』に記したこの時の行列の構成である。⁶⁷

乗四方輿借用執当、僮僕事、弁侍参会寺家門、侍橋親繼騎馬
馬鞍具足等法眼真全、舍人、口付童直垂、中間二人、如木、如弁、弁、小雑
借用方々了侍僮僕、色六人、力者八人、

勅使の行列が、勅使甘露寺元長の乗った輿と、侍橋親繼の騎馬とを中心に編成されていたことが知られよう。また、この記事で注目されるのは、行列に「僮僕」と呼ばれる童の下部が扈従していた点である。中島家本の行列には、馬や輿の前に行く「僮僕」の姿があ

ざやかに描かれている。清水寺本の総髪に従者も、中島家本の「僮僕」の姿から推して、同じ「僮僕」を描いたものと解してよいものと思われる。

むろんこの中島家本の行列が、文明十六年の勅使参向の行列を描いたものとは断定はできない。しかし、それにしてもこの行列がたんなる一般の貴人の参詣風景としてはあまりにも仰々しく、勅使参向もしくはそれに準ずる行列として、清水寺にとってきわめて大きな重大な意味をもった行列であつたろうことは、以上の点から十分に類推できるのである。そして、また、同じことは、清水寺本の行列についてもいえる。これら行列の図像も、鉢叩きの図像と同じように地物と組み合わせられることなく、また当然「場」とも関わりなく、本来はそれ自体で十分意味を理解しえる性格のものであつたため、逆に現在では、図像の意味したところが分かりにくくなつてしまつた図像といえよう。

同じような例が、「清水寺参詣曼荼羅」には今一つある。有名な延年寺谷を行く二人連れの人物の図像である。この二人の人物については、これを縁起に引き付けて延鎮と坂上田村麻呂とする説と、僧侶とこれに導かれた狩猟者の二人連れとする説の二つがある⁶⁹。従来の説では、主として該当人物の出入や、両者の向かう方向などが議論の対象となつてきたが、ここまで検討してきた人物の図像の在り方からすれば、この二人が単なる僧侶と狩猟者であるという説が成立しないことはあきらかであろう。彼らが歩む延年寺谷から寺内に進むという道程は、まったく意表をつくといつていいほど、画面では異例のものであり、延年寺谷はこの二人の図像のためだけに描かれてるのである。たんなる僧侶と狩猟者を表現するために、これ

ほどまでして延年寺谷が描き込まなければならない理由は、まったくなかつた。田村麻呂が延年寺谷をさかのぼって音羽滝に至つたという話は、『塵添壺囊鈔』第十七にも見えており、室町時代後期には広く流布していた。かの谷を行く二人はやはり延鎮と田村麻呂と理解するのが妥当であろう。

従来議論は清水寺本が未発見で中島家本のみをもつて行われていたものであるが、清水寺本の出現によって、図像表現の上からもこの点はあきらかになつたものと考ええる。すなわち狩猟者説の大きな根拠の一つに田村麻呂が剃髪姿であるのはおかしいという指摘があつたが、清水寺本では一人は剃髪姿にまた一人は頭巾姿に描かれているからである。

しかし、この図像を評価するにあつては、なんといつても重要なのは、この二人の人物が、他の図像とはまったく関わりなく、固有の「場」を造り上げている点にこそある。これは彼らが時間的にもはるかに隔たつた縁起の世界の人物であつたことを明確に指し示しており、ここでは取りあえず、この二人は縁起に登場する延鎮とこれに導かれた田村麻呂を描いたものと理解しておきたい。

以上、「場」に関わりなく、かつまた通絵図的に見た場合、あきらかに「清水寺参詣曼荼羅」に特有の図像と思われるいくつかの人物の図像について見てきたわけであるが、縁起に関わる人物の図像の場合、現実の「場」からはななばら隔絶して独自の「場」を形成する場合があつたことがあきらかとなつた。これははるかに隔たつた時間と空間を表現するための「場」の創出であり、信仰や縁起に深く関わつた人物の図像に限つて行われたことと考えられる。

同じく直接に信仰・縁起に関わつた人物の図像であつても、それ

がより重要な意味を持つ図像であった場合には、地物と結び付いて「場」を形成することがあったのである。むしろその場合、そこに表現された「場」は、延鎮と田村麻呂の図像の例が示すように、あくまでも信仰・縁起の「場」であって、現実の「場」ではなかった。鉢叩き、行列の一団、そして二人の人物、この三組の人物の図像は、信仰・縁起の世界で、その奥行きの深さによって、図像がそれぞれどのように処理されたかを期せずして、物語っているといえる。

むすび

「清水寺参詣曼茶羅」を素材として、参詣曼茶羅の空間構成について見てきたが、空間をいくつかの「場」から構成されるものと考え、その「場」を中心に分析の結果を総括すれば、次のようになる。参詣曼茶羅にあつては、「場」は基本的に地物と人物（「居住者」と「参詣者」）の図像の組み合わせによって形成されていたが、参詣道と寺内では、その組み合わせ方およびそれぞれの図像の占める比重に大きな差があつた。具体的には、参詣道では、地物と「居住者」の図像の組み合わせによって「場」が形成されることが多かつたのに對して、寺内では、それよりも地物と「参詣者」の図像の組み合わせが、「場」の形成により重要な役割を果たしていた。これは参詣道の空間が、寺内にいたる道筋を順を追つてたどる文字通り案内図としての機能を優先させ、いっぽう寺内の空間がたんなる道筋の案内ではなく、聖域の構造までも表現しようとしていたためと考えられる。参詣道の空間が道筋の案内図として作られたとすれば、寺内の空間は信仰の案内図としても作られていたともいえる。

また、一般の人物の図像とは別に、現実の「場」にあまり関わりなく、主として信仰・縁起と直線的に結び付いた人物の図像が存在した。それらの図像は、信仰・縁起をどの深さまで表現するかによって表現の仕方に差はあつたものの、もつとも根源的な縁起に関わる人物の図像では、二人の人物の図像に見られるように、現実の「場」とは別に、時間を超越して独立した縁起の「場」が形成されていた。また、これらのことを参詣曼茶羅における図像分析の方法といった観点からいえば、参詣曼茶羅の図像分析には、通絵図的な分析を前提として、一般的にはなによりもまず、現地比定と文献による精密な地物の考証がもつとも重要と考えられる。参詣曼茶羅が有する案内図としての機能を考えるとき、地物の考証は図像分析の大前提といつても過言ではない。ついでこれら地物と組み合わせられた人物の図像を「場」の形成という視点から抽出、「場」の複合のあり方を検証するなかで、参詣曼茶羅の空間構成を考察するという手順が必要であり、これら一連の作業を通じて、地物の図像と直接結び付かない特殊な人物の図像や、現実の「場」とはあきらかに異なる縁起の「場」は、自ら浮かびあがってくるものと考えられる⁽¹⁾。

紙面の関係もあり、当初の目標とは裏腹に、すべての図像を網羅的に取り上げることはできなかった。残された図像の分析については、別の機会に譲りたい。ただ、不十分ながら、総体的な図像分析の視角、および分析方法に関しては、それなりに私見を提示できたものと考ええる。大方のご批評をお願いし、小論を結びたい。

〈注〉

1 参詣曼茶羅に関する論文については、大阪市立博物館編『社寺参詣曼茶羅』（平凡社、一九八七）、および『伊勢参詣曼茶羅の深層—曼茶羅

から見た中近世の伊勢の諸相」（環境文化研究所、一九九〇）に詳しい文献リストが収められている。

- 2 参詣曼荼羅の空間表現についての研究としては、歴史学の立場からは西山克氏の一連の業績が「社寺参詣曼荼羅についての覚書Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」（藤沢市史紀要）第七、八、一一、藤沢市、一九八六、一九八九、一九九〇）、また、地理学の立場からは、岩鼻通明氏の一連の研究が注目される。「参詣曼荼羅の読図に向けて」（『芸能』二九一—一〇、芸能学会、一九八七）、「西国霊場の参詣曼荼羅にみる空間表現」（『人文地理学の視園』、大明堂、一九八六）。参詣曼荼羅を「聖地の位相空間の案内図」「大縮尺地図」として把握する基本的な立場は、西山・岩鼻氏の研究成果を受けたものであり、図像の分析の視角・方法においても、両氏の研究に負うところが大きかった。なお図像の分析にあたっては、筆者も会員である葛川絵図研究会の「絵図研究の視点と方法」（『絵図のコスモロジー』、地人書房、一九八八）に提示されている視点と方法をあわせ参考とした。
- 3 拙稿「中世非人の存在形態—清水坂「長棟堂」考」（『芸能史研究』一〇号、芸能史研究会、一九九〇）参照。
- 4 清水寺本と中島家本の差異については、改めて論じなければならないが、両本の違いでもっとも象徴的なのは、日輪・月輪の図像の有無と、寺内における勸進風景の描き方にある。すなわち日輪・月輪の図像は、中島家本がこれを描くのに対して清水寺本は描かず、また寺内における勸進風景については、清水寺本がこれを詳しく表現するのに対して、中島家本は勸化所のみをわずかに見える程度にしか描いていないのである。清水寺本の成立には清水寺の勸進部門を統括した成就院が、また、中島家本の成立には成就院と対立する勢力が、それぞれ深く関与していたことを示唆するものであろう。

- 5 参詣曼荼羅においては、図像とそれが描かれた「場」が重要な意味を有することについてはすでに西山克氏が指摘されている（座談会「社寺参詣曼荼羅の世界」（『月刊百科』三〇七号、平凡社、一九八八）。座談会「諸曼荼羅を見、語る」（『伊勢参詣曼荼羅の深層—曼荼羅から見た中近世の伊勢の諸相—」、環境文化研究所、一九九〇）。ただ、西山氏は、縁起・霊験譚に関わる図像に限って場の問題を取り上げておら

れるが、参詣曼荼羅場を「位相空間の案内図」と定義付けるならば、それぞれの「位相空間」において場を想定、議論する必要があるだろう。岩鼻「参詣曼荼羅の読図に向けて」（前掲注2参照）。

- 6 清水寺坂に木戸が古くより設置されていたことは、貞和五年（一三四九）二月二十七日の火災で「坂面ハ針（釘）貫マテ焼亡」したことが、『師守記』同日条に見えていることから知られる。なお、応仁の乱後の洛中洛外における木戸の著しい普及については、高橋康夫「応仁の乱と都市空間の変容」、洛中洛外図にみる京の都市空間」（『京都中世都市史研究』所収、思文閣出版、一九八三）参照。
- 7 瀬田勝哉「失われた五条中島—洛中洛外図を読む—」（『月刊百科』三〇四号、平凡社、一九八八）。
- 8 町田家旧蔵本のほか、上杉本、東京国立博物館本（模本）など中世後期の「洛中洛外図」は、すべて五条橋に欄干・擬宝珠を描かない。
- 9 前掲注8瀬田論文、および拙稿「晴明塚考—五条河原・清水坂に生きた人々の信仰」（『京都部落史研究所紀要』一〇号掲載予定、京都部落史研究所、一九九一）参照。
- 10 東京国立博物館本（模本）「洛中洛外図」、神戸市立博物館蔵「洛中洛外図扇面画帖」（『元秀』印）の図像では、明確に茶屋であることがわかる。
- 11 拙稿「中世的「勸進」の変質過程—清水寺における「本願」出現の契機をめぐって—」（『古文書研究』三四号、古文書学研究会、一九九一）。前掲注3拙稿参照。以下、この地区における長棟堂、癩者に関する記述については、同稿参照。
- 12 のちに火屋ついで物吉村が成立したあたりが、その所在地と推定される。前掲注10拙稿参照。
- 13 杉山信三「六波羅蜜寺の地藏堂について」（『史迹と美術』三三〇号、史迹と美術の会、一九六二）、柴田実・上田さち子「地藏信仰と泥塔供養」（『六波羅蜜寺民俗資料緊急調査報告書』、元興寺仏教民俗資料研究所、一九七二）参照。
- 14 前掲注3拙稿参照。
- 15 『山州名勝志』巻第十五（『新修京都叢書』第一四所収）。
- 16 『日次紀事』（『新修京都叢書』第四所収）正月二日「法会」条。黒田日
- 17
- 18

- 出夫「洛中洛外図上の大神人」(『境界の中世 象徴の中世』東京大学出版会、一九八六) 参照。
- 19 年月日未詳「清水坂者申状」(『北風文書』八坂神社文書) 上。網野善彦「中世の旅人たち」(『日本論の視座』小学館、一九九〇) 参照。慶長元年十二月付「坂奉行入連署売券」(水野恭一郎・中井真孝編『京都浄土宗寺院文書』知恩院文書 四一号)。
- 20 「洛外図」の景観年代を、狩野博幸氏は万治二年(一六五九)から寛文三年(一六六三)の間と推定されている(『日本屏風絵集成』第一巻「風俗図―洛中洛外図」、講談社、一九七八)。
- 21 『新修京都叢書』第一〇所収。
- 22 『新修京都叢書』第一五所収。
- 23 『雍州府志』卷十陵墓部(『新修京都叢書』第一〇所収)は、これを「平浄海塔」とし、『都名所図会』卷二(『新修京都叢書』第六所収)は「五条坂の遊女阿古屋が塚」に「無銘の石塔あり」と記す。
- 24 『山州名勝志』卷十五(『新修京都叢書』第一四所収)。
- 25 『新修京都叢書』第一一五所収。
- 26 『新修京都叢書』第一一五所収。
- 27 「経書堂」(竹村俊則「昭和京都名所図会」卷一、駿々堂、一九八〇)参照。
- 28 『京都市の地名』(平凡社、一九七九)。
- 29 中島家本は、清水寺本より一軒多く五軒の家を描き、内四軒に、本、人物、生け花、鼓と太鼓を描く。
- 30 『蔭涼軒日録』明応二年六月十九日条。
- 31 『言継卿記』天文十三年閏十一月十八日条。
- 32 江戸時代前期の「東山遊楽図」には、このあたりに女が酌をする茶屋が軒を連ねていた有様が描かれている。展覧会図録『桃山時代の祭祀と遊楽』(神戸市立博物館、一九八六)には、同図の「清水寺参道」の部分図が収められる。成澤勝嗣氏の解説によれば、同図の作成年代は、慶長末から元和の頃で、景観年代はこれより少しさかのぼるといふ。人物の図像分類については、すでに通説的な視点から黒田日出夫・西山克の両氏もこれを行っておられるが「黒田」熊野那智参詣曼茶羅を読む(『思想』七四〇号、岩波書店、一九六六)、西山「社寺参詣曼

- 茶羅についての覚書II」(前掲注2参照)、「個別の参詣曼茶羅研究においては、人物の図像だけを抽出・分類すること不可能であり、ここでは地物との対応関係を中心に独自の分類を行っていくこととした。
- 35 五条橋が豊臣秀吉によって、現五条通りに付け替えられたのは、方広寺大仏殿の造営時の天正十七年(一五八九)のこと。現在、京都国立博物館内には、秀吉によって架け替えられた橋の橋桁三本、橋桁二本が常設展示されているが、その橋桁(石材)には「津国御影 天正拾七年五月吉日」の日付が刻されている。
- 36 前掲注10拙稿参照。『花洛名所図会』所載(挿図1)の図参照。
- 37 大黒堂については、前掲注10拙稿参照。
- 38 前掲注18黒田論文、および前掲注3拙稿参照。
- 39 前掲注3拙稿参照。
- 40 『閑吟集』林屋辰三郎「清水寺の歴史」(展覧図録『京・清水寺』、京・清水寺実行委員会、一九八九)参照。
- 41 延鎮(賢心)は、流れ来る金色の水に導かれて大和より音羽滝に至ったと「清水寺縁起」は伝える。また同縁起は、滝の水を「八功德池の水」と説き、鎌倉時代の「清水靈驗記」は、この「瀧水」を飲んで病の癒えた話を載せる(『続群書類従』第二六輯所収)。
- 42 寛永六年(一六二九)九月の火災で焼失した伽藍の再建は、同八年二月より始まり(『舜旧記』)、同十年十月には本堂が竣工している(『続史愚抄』)。
- 43 貞享三年(一六八六)刊『新撰増補京絵図』は該当地に僧坊の屋根らしきものを描き「六坊」と注記し、文久二年(一八六二)刊『花洛名所図会』所載の図も同じ場所に「六坊」の僧坊を描く。また、この六坊の由来について、宝暦十二年(一七六二)成立の「御朱印寺法公論実録」(『清水寺文書』)は、「開山延鎮内供奉十禅師を田村摩呂之依御帰依二、御親類を清水寺之六坊として、則御銘々之御名乗を以、直坊号二御付被成候」と記す。ちなみに六坊とは、光乗坊、智文坊、蓮養坊、義乗坊、義観坊、真乗坊の六つの坊をいうが(天正十七年十二月三日付「光乗坊等連署書状」『成就院文書』)、真乗坊は早く織田信長の時代に、石山本願寺に味方したため、信長によって廃絶されており(年未詳八月七日付「村井貞勝書状」『成就院文書』)、近世初頭には実際は

五坊となっていた(宝暦十四年「寺格記録并願書」『清水寺文書』)。近世に入ると、本堂の勸化所の位置は時期によって異同があったよう
で、江戸時代中期には「本堂外陣」に置かれたとも伝え(宝暦十二年「一山本願之御朱印寺法公事之控」『清水寺文書』)、その一方、幕末の「花洛名所図会」所載の図は「清水寺参詣曼茶羅」と同じく轟橋のたもとに「勸化所」の建物を描く。前掲注10拙稿参照。

『花洛名所図会』所載の図参照。
ちようど該当地付近には、中世後期、参詣者を泊める庵があったよう
で、『宣胤卿記』永正元年(一五〇四)十月十七日条には、「申斜参詣
清水寺、東向・小女等相伴、自今夜参籠、奥之千手堂之北小庵為籠所」
とあって、中御門宣胤らが家族とともにかの庵を「籠所」としていた
ことが知られる。また、天正三年(一五七五)四月二十八日、清水寺
に参詣した島津家久は「其辺に奥の千手とて堂有、其あたりの小庵数
をしらす」と、やはり千手院の近辺に小庵が多数存在したことを記す
(『中書家久公御上京日記』。同記については、徳田和夫「浄蔵法師の恩
愛の妻子」(『絵語りと物語』、平凡社、一九九〇)が、東山の社寺への
参詣に関わる部分を引用されている)。なお比丘尼が桶を抱えていまま
さにその入口をくぐらんとしている、一番左の暖簾をかけた建物は、
現在「湯屋谷」と呼ばれている谷に隣接しており、「湯屋」を描いたも
のと推定することも可能である。

『菟藝泥赴』第三『新修京都叢書』第一二所収、貞享元年(一六八四)
序」は、清水寺の「奥千手院」を解説して、「本堂の辰巳の山きわにあ
り、むかしは多宝塔千手観音なりし、中頃より堂となりて、千手観音を
安置して靈験ありき」と記す。

慶長元年(一五九六)十二月には、まだ「鐘突堂」の北に坊舎を建立
しようとしており、旧地に鐘突堂は所在していた(同月九日付「前田
玄以下知状」『成就院文書』)。

『都林泉名勝図会』巻三は、成就院の庭園について、「成就院の林泉ハ
名庭にして、相阿弥の作、後に小堀遠州補ある所也」と記す。相阿弥
の造園という説はともかく、天正三年(一五七五)四月、清水寺に参
詣した島津家久が、寺内で見たという「庭の池水」も(『中書家久公御
上京日記』、注46参照)、成就院の庭園をおいて考えられない。

50 前掲注12拙稿参照。

51 『陸涼軒日録』延徳二年八月晦日。同記にはこのほかにも「詣清水寺入
願所、踏雪、々所快然、実可嘉賞也」(長享二年五月二十二日条)、「往
願阿庵利、與鹿苑茶話数刻」(同年九月十日条)、「詣清水寺、如恒倚願
所休息、打話移尅」(延徳三年三月十八日条)など、参詣時に「本願」
と呼ばれていた成就院に立ち寄った記事が散見する。

52

慶長末の勝興寺本「洛中洛外図」はもとより、寛永期にかかる時期の
景観を描いたと推定される神戸市立博物館本「洛中洛外図」も、石垣
で囲まれた高台に朝倉堂を描く。

53

『京都坊目誌』下京第廿二学区之部(『新修京都叢書』第二一所収)は、
この出来事について、「朝倉堂再建に際し、地均の為め同所の地七尺を
発掘せしに、鍍金の観音ノ像を蔵むる一ノ石棺を得たり」と記す。朝
倉堂は、成就院が自力で建てた堂舎であり、再建にあたっては、その
本尊になんらかの由緒を持たせる必要があったのであろう。

54

寛永後期に属すると思われる景観年代をもつサントリー本「洛中洛外
図」になると、すでに朝倉堂は本堂と同じ平面に描かれる。『日本屏風
絵集成』第一巻「風俗図」洛中洛外図(講談社、一九七八)の図版
参照。

55

前掲注12拙稿参照。

56

前掲注12拙稿参照。

57

西山克「社寺参詣曼茶羅についての覚書II」(前掲注2参照)。

58

参詣曼茶羅に描かれた「門前で掃除する僧」としては、「那智参詣曼茶
羅」(三重、西光寺蔵)、「長命寺参詣曼茶羅」(スイス、P、V、フグ
ラー氏蔵)、「千光寺参詣曼茶羅」(兵庫、個人蔵)、「東観音寺古境内図」
(愛知、東観音寺蔵)などがあげられる(『大阪市立博物館編「社寺参詣
曼茶羅」、前掲注1参照」)。

59

前掲注12拙稿参照。

60

中島家本では、泰産寺内に「柱」を描かない。これは多分、「柱」を立
てるのが、中島家本の成立したころには、すでに行われなくなつて
いたことによるのであろう。

61

天下無双佐渡七太夫正本「せつきやうしんとく丸」(正保五年「一六四
八」刊)。

62 天下無双佐渡七太夫正本『せつきょうしんとく丸』。絵画資料では、はやく室町時代後期の伝土佐光久「清水寺図屏風」(東京国立博物館蔵)に滝詣での姿が描かれている。

63 『出来齋京土産』巻三「『新修京都叢書』第十一所収、延宝五年(一六七七)刊」は、この三十三度の「滝まうで」の様子を「よろづの病あるも、此瀧にうたるればいゆるとて、しきみの枝手にもち、三十三度の瀧まうでするもたうとし」と記す。

64 『京羽二重』巻一「『新修京都叢書』第二所収、貞享二年(一六八五)刊」な、「めくら石」について、「清水寺地主権現の前なり、此石左右に式つ堀居たる石より石まで、目をふさぎてあゆみよるに、すぢ違て行あたらず、此故実由緒有事にこそしらずかし」と記す。

65 「めくら石」(竹村俊則「昭和京都名所図会」巻一。前掲注28参照)。
徳田和夫「法楽と遊樂の図像コスモロジー」(『絵語りと物語り』所収、平凡社、一九九〇)。

66 西山克「社寺参詣曼荼羅についての覚書II」〔前掲注2参照〕。

67 『親長卿記』文明十六年六月二十七日条。

68 徳田和夫氏がこの二人連れを延鎮と坂上田村麻呂と解釈されたのに対して「絵解きと物語享受」(『文学』五四―一二、岩波書店、一九八六)、黒田日出夫氏はこれをたんなる僧侶と狩猟者と解釈「黒田日出夫「参詣曼荼羅と文芸―清水寺参詣曼荼羅の読解―」(『国文 解釈と鑑賞』五二―九、至文堂、一九八七)、ついで西山克氏が黒田説を批判して、徳田説を支持された「西山克「擬装の(風景)―清水寺参詣曼荼羅をテキストにして―」(『芸能』三〇―七、一九八八)」。

70 洛中洛外図を始めとする各種の名所図においては、原則として、縁起の「場」は描かれない。これはかの種の絵画が、参詣曼荼羅ほど「案内図」としての性格を濃厚に有していなかったためである。

洛中洛外図・名所図が、清水寺を描くにあたって、多少のバリエーションはあるものの、基本的には、地物の図像では舞台をもった本堂と音羽滝およびこの二つを結ぶ石段、また人物の図像では水汲みと願人と参詣人といった、ごく限られた図像のみをもって、これを表現しているのも、同じ理由による。つまり、ここでは、描かれた場所が清水寺であることが了解される最小限度の図像だけが必要とされていたわ

けであり、参詣曼荼羅とこれらの絵画資料との表現の仕方の最大の違いはここにある。

また、これと関連して、指摘しておきたいのは、洛中洛外図・名所図が、粉本などの使用によってであろう、しばしば実際にはありえない誤った図像を採用してしまっているという点である。具体的な例としては、町田家旧蔵本「洛中洛外図」の清水寺三重塔が多宝塔などの宝塔にしかありえない隅棟飾鎖をもつ姿に描かれていたり、上杉家本「洛中洛外図」の音羽滝の願人がこれも実際にはありえない滝宮に尻をむけて拝む姿で描かれたりしている事実をあげることができる。「案内図」としての性格を濃厚に有した参詣曼荼羅では、このような誤りが生まれる危険性は比較的少なかったものと考えられる。

ただ、本文でも触れたように「清水寺参詣曼荼羅」においても五条橋が実際より美化されて描かれるなど、いわゆる「絵空事」の部分は、決して少なくない。しかし、それらは洛中洛外図の場合とは異なり、意図的な誇張・美化であり、絵を見る人々も、そのことを充分了解していたものと考えられる。この点で、二つの「絵空事」は峻別されなければならぬ。

近年の図像研究では、ややもすれば絵画資料を過去に存在したものをそのまま写しとった写真のように理解・利用する傾向がないでもないが、絵画資料を素材とするに先立っては、それぞれの資料が持つ固有の性格を厳密に検討・掌握しておくことが不可欠であることを、ここに改めて確認しておきたい。